

東京俳談

時に麥からが火になつて子供たち夕暮 北朗

(農平)「時に」といふが、その意味は「時々」といふことなのでせうね。

(筒火)言葉は全く魔物ですね。それが「時々」だつたら驚きはしないが「時に」でぐつと面白くなります。

(夢道)これは……其氣持の上では解るが、一般的にはどうでせう。解らないのではありませんか。こういう云ひ方は我々日常の談話の中ではあまり使はないように思ふのですが……。

(井泉水)談話では普通に「時に君……」と話題を新しく持ち出す時に使ふその「時に」とはもちろんだらう。だが「天勾踐ヲ空シウスル勿レ、時ニハンレイ無キニシモアラズ」の「時に」は誰でも知つてゐることだから、此の句としての「時に」も解るだらうと思ふ。

(夢道)「時々」とも違ふように思えますが……。

(井泉水)それは違ふ……煙が或る時は火になつたり、又ある時には煙になつたりしてゐる、その「時に」なのだろう。

(市朗)とにかく「時に」で、夕暮どきに麥からが時々ホーツと火になつたりする、その明るさが生きてゐますね。

(八洲雄)作者が不同凡響の時、麥からが火になつたり、時に、時に、を打ち上げたもの、どうか……

(勤吉)「時々」というと特定の時間を指すのだが、ここではさういふ強い意味ではない。作者は、其時、麥からに意識を集中してゐたわけではなく、何心ない視線を移した時の、その「時に」ぐらゐの軽い意味なのでせう。麥からと作者には相當の距離があるんですね。

(星童)この句は全體として感覺的な感じですから、さうハッキリと、其の場合をセンサクして決定してしまはなくてもいゝのぢやありませんか。これで、感じて解るのぢやありませんか。

(夢道)感じだけで解るんだ、それでいゝのだと云うのでは句を鑑賞する態度に不徹底ではないだろうか。

(井泉水)「時に」はこの句では、句の面白みとしては、ハッキリしないのが面白いと思ふのだが……なんと云ふのかな……酒井三頁や小川幸鏡が描いてゐる繪、あのようなものであつて、墨のじみのやうな味で出てゐるので、こういう表現は、油繪のようなハッキリした間違ひのない表現ではいけないのであつて、ぼんやりしてゐるのがこの句の味ひなので、そのぼんやりしてゐるのがいけないと云うのでは、この句の味ひを否定することになる……。

(秋紅蓼)この作者に「鳥の草木にありて實に夕焼け」と以前にあります。「實に」の使い方が北朗の獨自のものですが、この「時に」もそれと同じで、一般にはスグ來ないかもしれないが、北朗獨特の使い方であり、これが持味なのでせう。

(井泉水)言葉の使ひ方に普遍性は必要だけれども、一種の個性のある使ひ方といふことも是認して……。

(夢道)この使ひ方が肘杖ではあつたから面白い、片言片語でも使ひ方に餘蘊がないから、これは北朗の句だから……

通るのでは僕は承服出来ません。大體、この句は「時に」の言葉使いが珍らしくて讀者を「先づ引寄せ」るのが、言葉の使用法としては不健全なのぢやありませんか。

(衣谷) いや立派な貫祿のある句だと私は思ひます。しかし「時に」は假名で書くか「時には」とするのが本當なのぢやありませんか。

(番紅花) 「時に」を私はそんなに難しく考えるには及ばないと思ふのですが……。

(井泉水) 「時に」で議論になつてしまつたが、むしろ此句として一番カンジンなところの「子供たち夕暮」という方を検討してもらひたい。

(莖吉) 層雲としては普通の表現でせう。

(夢道) これには難はありません。問題は「火になつて」です。

(八洲雄) 「火になつて」はうまい。黒い白い煙の中で、時に火になるのですから……。

(夢道) それで、この火になつてるのは、脱殻したカラなのか稗なのか。「夢から」という言葉の意味からすれば、夢の莖の乾いたものということであるのだが……。

(市朗) これはイガでせう。

(莖吉) そういうことは問題ぢやないぢやないか。夢釋だろうが稗殻だろうが、そんな詮索は句の鑑賞にはなんの影響もない。そこ迄追及するんなら、火の燃えつきがいゝか悪いか……とまでなるこりやア文字の單なる意味だけのものぢやない、夢釋も稗殻も一緒にしたクツの推積なのだ。この句で作者の意圖した主題は、「子供たち」にあるので、夢からは云はばツマの存在にすぎないのだ。

(井泉水) 俳句の評はいつもそうだが、部分の批評にはじまつて(これは批評の對象にしやすいものだから)その部分的の批評に花がさいて、全體的の批評の方がおろそかになつてしまふ。此の句の「味」の主要なところは「夕暮」にある。農村の「夕暮」といふ農民の生活の中にある平和な一時——一日の勞作をおえてうちにかへるその前、太陽は一日の光を地上にあたえてしづかに山にすすむ、そいふ平和な一時。ミレエの繪にあるやうに、古典的だけれども、決してふるくさくはない、われ／＼の生活の中にいきでる感情としての風景なのだ。そこに「こどもたち」といふものを見つけたのでその風景が、ミレエのやうにゲンシユクではなくて、其よりもすつと親しく、あた／＼かく、ほ／＼えましいものになつてくる。正月に子供がドンドやきをしてゐるやうに、火の光をかこんだ子供たちの圓い顔が闇の中にホツと見えてゐるのも、實に平和な感じだ。煙の中から、時として、赤い火がドツともえあがると、そのセツナに子供の顔が浮き出ると共に、その火をかこむ子供たちの心も火のやうに楽しくゆらぐのだ。一々カンセイをあげなくとも、カンセイをあげたい位な氣持。子供たちの氣持そのものが火になるのだ。だから、「夢から」の物質をふかくセンサクする必要はない。で、その火の勢がもえきりにもえてゐるのでなく、黒い煙の中から時には、赤いホノオが立つので、此の風景にも、氣持にもニユアンスが出来る。そのニユアンスを出したものが「時に」なのだ。こうしたニユアンスは、繪でいへば墨のボカシといふもので、作者の個性のいちばんに出るところなのだから、ことばとして、個性的な用法をすることは、許されていゝばかりでない、そこにウマミを出したいところだ。尤も、こうしたウマミだけで、味はせようとするのはいけな

いが、句全體としてうなづかせるものを持つてゐる以上は、こうした個性的なことばの用法も、人をうなづかせ得るとおもふ。此の句の味ひ方として云へば、この表現をむしろ逆に

夕暮——子供たち——火になつて——夢から——時に

夕暮のしつとりとした空気のほのぐらさ——その中にまた日暮をたのしんでゐる子供たち——その子供たちの圍む火——それは夢からの火——それを作者が或る時間じつと見てゐる氣持……こういうふうな風になつてくるに、「時に」といふことは、につまづくことばはなかるうと思ふ。

おまつりふうせんすばむきふえ 井 夢

(八洲雄) 子供の氣持がよく出てゐますね。

(莖 吉) 生き／＼した子供の表情も見えるようです。

(稻 市) 「すばむき」が問題になるところでせう。

(井泉水) 「おまつり」と上にのつけたところはどうか。

(莖 吉) いゝでせう。これで全體を出してゐるのですから……

(秋紅蓼) おまつりを上にのせたので、ふうせんの笛が利いてゐるので、お祭だからなので、それを擱んだところが好いですね。

(夢 道) この句は層雲の作家にはよく解る、これが解らぬといふ層雲人があつたらせいづはマカだと言へるが、しかし、テニヲハ抜きの此様な舌足らずの句が、定型の人々から時々非難される自由律の一つの代表的なものなのです。これは恐らく定型の人には解らない句であり、層雲だけの仲間だけの句だと云はれるかもしれない。これではいかと聞かれて、そんな場合どんなものでせう。

(莖 吉) テニヲハを抜いて言葉を積んでゆく構成の、此傾向は層雲でも最近できたもので、濫觴は俊二あたりなのだ。これを昭和十六年頃俊二がはじめた。それが發火點だつた。その傾向には批判すべきものがあるかもしれない。だが、層雲の過去の推移に目を通してゐると、これも層雲の一つの歴史的段階の一つのぢやないか。そうして、これは、いやしくも俳句に親しむ者であれば定型人でも俳句として理解出来る筈だと思ふね。

(夢 道) しかし層雲の發展の爲には、こうした表現や内容といふことは、もう少し考へてやつてもらいたいと僕は思ふね。そりや理解の出来ないことはないさ。だが、内容的に生活というものがちつとも出てゐない。作者はお祭という人間的な生活的行事からニヒルな淋しさだけを捉えようとしてゐる……形式だつて、層雲としては新しいものとは云えないしね……

(秋紅蓼) 私は……こういうものが、句の表現というものは、つまりその……こうしたものが、その、本質なのぢやないか、と思ふのです。テニヲハをつけて意味をつなげてゆくのが本筋だが……昔からやつてゐる、省略の方法の内面的リズムが、こゝへ来て、生きてゐるので、これは北期などもよくやつてゐるものなので……この句など、一つ一つ言葉を重ねてあるだけで、言葉と言葉につながりはないようだが、そこに、氣持の上でのリズムにつながりがある。つまり、昔の省略を、今に新しく生かした表現なのだと云えませう。

(井泉水) 俳句の表現で、積重ねるテクニクは昔からあつたので、例を云えば「奈良七重七堂伽藍八重櫻」などがある。とにかく元祿の頃から言葉を省いて表現しようとする意圖はあつたので、世

蕉にもこの試みはあつたのだ。言語學でかういふ表現をジャクスタ
トボジションといふ。西洋にもある。これを研究するのも好むぢや
ないか。しかも俳句の初期時代からあるものを、こんにち再び取上
げて、それを一つの表現法として、こころみるということは好む事
ぢやないか……。

(農 平) 普通ならコンマを打つとか「おまつりの」とのを入れ
るとかするのでせうが、それをしないで現したところがこの句の面
白味なのですね。

(夢 道) 意味からゆけば「お祭の」とか「風船が」とかなのだ
が、それぢやアつまらないから助詞を省いたのだと、そんな氣もす
る……。

(番紅花) 單語を重ねただけの形、これは肯定できませんし、それ
がいけないと言う論はどうかと思ひますが……唯この句は、風船一
つ、しかも、すばむ時の笛でお祭に對する感じ方があまりにも淋し
すぎはしませんか。秋の祭は、殊に揚末や田舎は淋しいものですが
……これだけでは餘りに神經が尖りすぎて、呼吸苦しさを覺えます。
線が細くて強すぎる……で、もつとのんびりさせる意味から、風船
そのものに中心を移して、お祭の風船と、すばむ時の笛に興味をも
たせると……或は句の格は下がるかも知れませんが、ちよつと微笑
まされるものになるのぢやないでせうか。

(井泉水) それも好かるうが、それは又別の談でこの句として
は、お祭とは云え、淋しい、その感じ、それを出したのでせう。淋
しさが此句の持味でこれは是として是でいゝのでせう。

(莖 吉) 祭を背景にした子供の世界なのですね。竹の柄に赤い
羽や青い羽が植えてあつて、羽の中から赤い風船がのぞいてゐる。

ふくらませて風船から息を抜くとき、一種の哀音を發して笛が鳴
る、この笛には郷愁がある、お祭と云う子供の夢が、この笛によつ
てふんわりにぢみ出てゐる……、その子の紅潮した頬が見えるよう
だし、いとほしい亢奮も感じられる。作者のいたわるような眼も見
逃せない……。

(宵 火) じつさい、この笛にはお祭の感じがあるものでね。こ
のふうせんのおえには大人のノスタルヂヤがあるのですね。

(夢 道) そりやアそれが出て居れば成功してゐる。しかし僕は
思ふね、祭とは別の淋しさ、貧しき、作者の、こうした内容によつ
て表現した、それで成功してゐるのならいゝ。くどく云うが、たゞ
こういう積重ねた表現の面白みだけではつまらん……。

(井泉水) きつきから問題になつてゐる、解る、解らないの事だ
が……、解らない句は駄目な句だとするのはどうかと思う。我々が
一般人を標準にして解る句を作つて、一般人を本意にして、一般人
に妥協してゆく、そんな必要はないので、この句の場合「おまつり
の」とのを入れた方が解り易いからとして、解り易くする爲に別の
表現をするなどと、作者的良心を捨ててまで妥協することはないと
思う。芭蕉時代にも、芭蕉の句が一般には解らない場合があつたの
だ。外國の詩には評釋を必要としない。評釋を要するものは「第二
藝術」などといふ、大ザツパな議論は承服出来ない。今でも、一
般に解らないとしたら、それを解るやうに啓蒙する運動をおこし
て、手引をしたらばいゝ。作者が自分の藝術的な良心に於て、此の
表現こそこれによしたものだつたら、それでいゝのぢやない
か。もつとも自己陶醉や一人合點では困るし、表現とかリズムと
か、打出すまでには反省を重ね推敲もしてのことだが……とにかく

作句の上で世間におもねる必要は無いと私は信じてゐる。だと云つて、解らない者は解らない方が悪いのだと、神が、りに云ふのではなからう。

(秋紅夢) 實際リズムがうまくさえゆけば必ず解るものですね。

(井泉水) その作品が、何か本質的なものをつかんでゐるかどうか、言葉の生命をつかんでゐるかどうかと言うことで……これは難かしい問題なのだが……大體論として……古い言葉だが「まこと」のある氣持が出て居れば、解るのぢやないかと思ふ。

(夢) しかし、層雲は、もつと社會性を持たねばならぬですよ。その限界が問題だが……。とにかく、社會人の常識で解るものを作るべきですよ。少くとも藝術は、或る程度妥協すべきですよ。

(井泉水) 藝術の社會性ということとは……常識的といふことよりも、もつと深いところの面において考へた方が本當だとも思ふ。詩といふものは、萬人が萬人解るものではない。詩の解らない人には何といつても、遂に解らない。文化人であつても、文法だけは知つてゐても、詩についての感度は持つてない人もあるのだし、そうした人には、詩というものは斯ういうものだといふことから教育した方がいゝと思ふ。

(夢) だから、この句が好い句であるとするれば、解るようにならねばなりません。とにかく、仲間だけで解つてゐる、それだけでは不可んと思ひますよ。

(井泉水) では、解釋をするとしてしよう。

おまつり——ふうせん——すばむとき——ふえ

此の句はしぜん四節になつてゐる。おまつりには、たゞ物店も出てゐるし、子供のほしい物を賣る店も出てゐる、ほしい物もいろ／＼

ある、その中で、此の主人公(かりに一人の子供とする)は「ふうせん」を手にしたのだ。で、此の子にあつては自分の心がふうせんで「ばいなのだ。おまつり」をせんじつめれば一個の「ふうせん」になる。「おまつり」は「ふうせん」なのである。その「ふうせん」を愛撫することに依つて「おまつり」をたのしんでゐる。つまり「おまつり」を象徴してゐるものが「ふうせん」なのである。だから「おまつりのふうせん」ではない。「おまつりのふうせん」といふと「ふうせん」は「おまつり」の一部分になる。そうではない。「ふうせん」が「おまつり」の全部なのである。即ち「おまつりふうせん」なのだ。この間に「の」の字を入れては作者の氣持にちがう。次に、「ふうせん」はふけばふくらみ、手をはなせばすばむ。ところで、此の子はその風船がふくらむ時をたのしむことはたのしむが、その風船がしぼむ時の姿に、一そうさみしきを感じたのだ。こういうふ神經をもつた少年がある。云ひかへると「ふうせん」の風船らしさを、ふくらむ時にでなく「すばむとき」に感じたのだ。即ち「ふうせん」は「すばむとき」に於て、しんじつ「ふうせん」なのである。これが「ふうせん」すばむ時」であつて、「ふうせん」がすばむ時に「といふ「が」や「に」を入れた心持とはちがう。次に、風船がすばむ時にピツと鳴る、その「ふえ」に此の少年は、子供らしい美しさの「あはれ」を感じたのだ。その風船が生きものであるやうな。親しさ、自分の友達であるやうな、自分と同じ氣持をもつた者のやうな聲を感じたのだ。それはいかにも「ふうせん」らしい聲である。したがつて、「おまつり」の聲でもある。一日、にぎやかにようされて、その後は又火のきえたやうになる村の祭といふものゝ感情、それはこの「ふえ」といふものに象徴されてゐる。つまり、

「おまつりふうせん」すばむとき「ふうせん」といふ、一連の象徴的な表現なのである。「おまつりのふうせんがすばむ時にふえ」といふ散文的な表現とは本質的にちがう。決して物すきに、テニヲハを省いて、新しがりをしたものではない。

(市 朗) 私の會社に定型作家が澤山ゐて、それに層雲を見せますと、解らないことはない、殆ど解ると言ひます。だから、そんなに解らない事はないでせう。一般は、層雲を相當理解してゐます。

此の子學校へやるだけが夏の日がちやがちやミシンになる

星 童

(宵 火) 橋本さん、こういうのが解らない句だと云うのちやありませんか。こんなのが悪くすると獨善的になりやすい……。

(夢 道) さうですね、解るけれども……。「ガチャガチャミシンになる」は一體、どう云うことなのか、文法的に云つて、一般には常識では到底理解することが困難でせう。

(宵 火) 後期印象派といった表現ですね。

(飛泉子) 「がちやがちや」はどうでせう。

(莖 吉) 必要でせう。これは單なる音でなくて生活なのです。

(夢 道) これが解ると云うのが僕には解らん。これはあまりに病的だとも思う。これがどういふ事なのか、納得のゆく説明をしてもらいたい。でなければ僕は……。

(飛泉子) 實際、層雲の仲間うちだけで解つてゐると云うんぢやア困る。

(莖 吉) これが解らないかなア。解ると思ふがねエ。

(夢 道) 解るといふことだけぢやないのだ、僕が云うのは……解るだけでなくこれが批判に堪え得る解釋をしてもらいたいのだ。藤村の詩でもゲーテの詩でも一應の註釋は出来るのだから……。

(稻 市) 素人に解るようにかい、それとも文人にこれが解らないから解るよう説明しろと云うのかい。

(飛泉子) 少くとも對外的に解らすべきだ。

(稻 市) そいつは恐れだね。そんなもの……對外的に解らせる必要などありやしないよ、詩だもの。對外的に妥協する必要などないやね。

(夢 道) ミシンになるというのはどうも……。

(稻 市) 動き出したミシンになるのだ。

(農 平) ミシンといふ機械が動いて製品を作りだしてゆく、その動きを見てゐてのことなのだろう。

(番紅花) そうですね。これがさう難かしいことはないので、ミシンは時々驚く程大きな音をたてる、殊にこのミシンは「なる」と云うので夏の日の暑さと、夏特有の靜かさの中で、天地も人間の生活も一切がミシンになるような音を立ててゐて、此のモデルとした人の生活をこれによく表現してゐると思ひます。

(衣 谷) なると云うのが、云はば此句のミンなのですが、もつと自然で、層雲の臭味を出さないボキヤブラリはないものでせうか。層雲作家はこうした點、もう一度考え直してほしい。

(八洲雄) ガチャ／＼は音なのだから……これが……ミシンの音になるなら解るのでせう。

(夢 道) それなら解りますよ。

(莖 吉) さう云うのは、言葉としての多少の破調に、あまりに

拘泥しすぎるものだよ。こりあア攀ろ、生活する母の、緊迫した息使いが、この直截な表現で出てゐるのだ。これが解らんと云う人の宿命はどうすることも出来ない。とにかく危くすれば新派悲劇に陥るこのドラマチックな内容に取組んだ作者の野心を買つてやるべきだ。

(秋紅蓼) 表現に無理はあるが……夏の日にサイレントがあるの
で……名詞を動詞にしたところにこの句の面白味がある……。

(井泉水) 「雨になる」と云ふ表現があるだらう。「ミシンになる」同じなのだ。だからこれで解る筈だがね。夢道君の云うのは、此表現によつては、内容に無理がなくはないか、と云うのだから……この句で、「やるだけが」とコンマがある、これから「夏の日」ここにコンマは入れてないが、リズム的にはコンマのある氣持である。その氣持で味うとよく解るのだ。それから「なる」は別に難かしいことでもないの、文法的にも、そう無理な表現でもないだらう。「御飯にする」と云う「御飯になる」とも云う、その違いに過ぎないのだ。「ミシンにする」「ミシンになる」だ。「御飯になる」が解れば解る筈ぢやないか。

(夢道) ですが「なる」と「する」とは先生、違つてせう。

(井泉水) その違つるところを同じと見たところが此の作者の感じなのだ。御飯にするから御飯になるので、「御飯にする」のは「する」といふ、「しようとする」意志がある。「御飯になる」のはしぜんになる。意志から出て意志をこえたものだ。「する」と「なる」の關係は、この場合、日本語を使つて生活してゐる日本人なら解る筈だ。ミシンをかけること、即ちミシンにするのだ、それがそうではなくて、ミシンになると作者は感じた、そこなのだ。親切に讀めば解つ

てくれると思うね。早い談が物をたべる時に、こいつはかたいとはきだしてしまつてはツキレリの談。骨が一寸舌にさわるとベツ／＼と吐きだされたのではおしまひだ。骨をぬいて、誰にもたべよいうに料理するのも、一つの方法だろうが、それでは本當のうまい料理は出来ない。みんな大衆的なオムレツやカツレツの類になつてしまふと思ふ。

も少し委しく云ふと、獨逸語で云ふ Sollen と müssen とのちがひだ。ゾルレンは義務としてしなければならぬ、ミュツセンは自然にしなければならぬ。是は全く別の氣持だが、ゾルレンが即ちミュツセンになるところに、人間の本當の生活がある。「ミシンにする」のはミシンをしなければならぬといふ仕事の意識がある。ミシンと其人との間にキヨリがある。「ミシンになる」のは、ミシンと其人とが一枚のものになりきつてゐる。そこまで「なる」——なりきつたところに本當の生活がある。即ち仕事ではなくて、生活なのだ。其人のからだ全體がミシンになつて動くのだ。其人がミシンを使ふのではなくて、其人が「ミシンになる」そこを味つてもらひたい、そして其の味ひといふものは「此の子學校にやるだけ……」といふ、其人のしんけんな生活意識からしみ出てくるものなのだ。だから「此の子學校にやるだけ」が「夏の日」と上から讀みおろしてツシヤクしてくれば、この「ミシンになる」もよくかみくだいてもらへると思ふのだが……上にも云つたやうに、句の全體のカンドコロを捕へない先に、一句の中の部分的のところを取り上げて、ワカラント云つてはきだしてしまふので、味もツツケもない談になつてしまふ。解らないときめつけける前に、それを解りたいと思ふ氣持……らしい氣持の抱擁性——愛情といふものが大事だと思ふ。

(管 火)「ミシン」で切つてしまつても句になるんですね。それが「なる」があるので女の人の動きも出るし、その氣持の陰影も濃いものになるのですね。

(井泉水)「……やるだけ」があるのが「……になる」に響いてある。

(三 砂) 音の表現ですが……ガチャガチャはどうでせうか。濁つた感じはありはしませんか。

(井泉水) 或はカチャカチャがいかもしれないね。

(衣 谷) カタカタ位がいかちやありませんか。その方が孤獨なわびしさを詠うにはいゝのちやありませんか。

(莖 吉) とにかく、盛澤山な内容に敗北しないで、よくこなしきつてゐますね。「夏の日」はよく坐つていささかの動揺もないし、夏の眞晝のしろじろとした哀愁が、秋の日暮や冬の朝のそれとは色彩の違つた重、妖しいまでのしづけさ、眞空的なあたりの空氣の中に、「この子學校へやるだけが」の願望に向つて、未亡人の、生活へのひたむきな闘ひがミシンに集中されてゐる。ミシンは強い母の人格がのりうつつたように活潑に動く……出てゐます。

(井泉水) これは星童自身のことではなく、或る人をモデルにしたことは明白だが、こゝにいふ風に、自分が其人になりかわつて書くといふことをケイユすることも大切だとおもふ。さういふ人がゐる(……する奥さん)又は「未亡人……してゐる」といふ風に、客觀的にうつつすことの代りに、自分がその人になつてしまつて、自分のことを云ふやうに書く、さういふ書き方は、やはり一つの書き方です。

(後 二 記)

清 露 抄

井 泉 水

家うら夜明けた汽車が通るをわりごろのトマト 敦之

夜明けに通る汽車と、をわりごろのトマトと、此の二つのものを一句に統一してあるからには、そこに朝早く起きてゐる一人の人(作者自身でもよろしい)を置かなくてはならない。これを味ふ側から客觀的に見れば、さよりに一人の人がゐるわけだけれども、これを作る側から主觀的に見れば、人間は作者みづからなのだから、そこにあるものは、やはり夜明けに通る汽車と、をわりごろのトマトだけである。もつとも「家うら」といふ言葉をもつて、自分の家のうらだといふことを表し、作者みづからがそこに立つてゐることを暗示させてゐる。さうして、それに依つて、作者が毎朝夜明け頃から起き出て生活をはじめ、さういふ生活態をもつといふこと、汽車のレールに近くて、汽車が通る毎に地震のやうにゆれる小さな家に住む、さういふ生活態をもつといふこと、僅かな茶園にトマトを作つて食事のいろどりとしてきた、そのトマトももうおしまひだといふことをかる／＼しくは見ない、さういふ生活態をもつといふことなどが、暗示的に浮き出てくるところに、一つの生活の世界がくつきりと打ち出されてゐる。此の句の完成された味ひはそこにある。

關東層雲俳句大會記

筒井 莖吉

十一月三日大會を開く。會場は上野の博物館裏の應寧館。ここは幽すいな林泉をもち、醫院風の寂びた建物で、前庭の大銀杏が満身の秋を揺落している。先生五十年生誕記念大會をひらいたのも秋のこの日で、あれから十四年、先生も六十四だが、そのふじぎな紅顔はあせようともしない。其後きようまで數度開かれた大會にいつも幹事に引つぱり出される筆者は、集つた六十五の顔ぶれをみて、回顧感しばしであつた。怒りようたる常連、ほとんどが見知らぬ顔であつた。このごろの社會情勢を反映してか、遠來の同人は信州の北期羽人ぐらいで、かつて中部關西は勿論、九州の同人まで集めた過去の大會を憶つて、筆者は空腹な秋をさらにひとしお感したのであつた。

例によつて例の通り秋紅蓼の開會の辭によつて會はひらく。秋紅蓼も老いた。彼の作風が枯れはじめると同時に、そのひようびようとした貌のしわの刻みは深くなつた。——北期の皓齒と饒舌は衰えないが、びん髪の霜はさらに光りはじめた。さとの黒髪にも秋の霜は深くなつた。選句——三百五十五句ではちよつと疲れる。記念撮影で前庭の芝生にでる。大會の記念撮影といえはいつも童顔に眼を細めた麟郎がゐない。麥村がゐない。せい作が、草十子が、綠葉子が、武二がゐない。……赤坂、芝浦の會には秋鬼死の遊藝があり、築地伊吹の會には山頭火の雲水のやぶれ衣があつた。——それもこれもひとむかしのはなし。たいていの會をかかさぬ藜々火のむ

つつりした顔も、滴々事の旦那はんものない。ひるめしがすんで批評、三百數十句の結果をいちいち讀みあげたのでは、筆者の喉も少々まいつた。先生の批評があつて後、本年度の層雲賞の發表。ことし二十二才の美青年平松星堂が、紅潮した顔にその榮光をうける。筆者が文學少女だつたら惚れるところだ。俳談會がはじまるころ一石路がひよいと顔を出す。病後の體秋が六年振りの巨軀を現わす。いつか夕暮近い陽の色となる。應寧館を、景に、じつとり時代のついた座敷、夕陽をいつばい吸つた障子の明りは、俳句を語るに適した雰囲気。俳談會は筆者の司會で、今日の高懸句八句を選んだ組上にのぼらせる。(この記事は次號に掲載の答)

へき頭の俊二の句に舌鋒が集中する。むかしから東京の俳談會は、うるさがんの多いところとてケンケンガクガクの論戰に賑わふのである。北期と夢道が舌戰を交えてゐると、稜秋がとび出してくる。稻市がなにごとにも斷定的な口調でぶつぶつ呟く。巴水樓は句を解剖してしまつて、手がつけられなくしてしまふ。夢道は句に生活感情とイデオロギーがなければ、すべて茶ツ葉でもさるようになり棄ててしまふ。司會者は大汗でこの舌調を擧げとめて、新人の意見も叩く。宵火は少女のようにはにかみ、星堂は純情な牧師のようだ。司會者は一石路の意見をも水を向けるが、この俳壇の論客は微笑したのみで、その唇は重い。十數年前、夏の麻布俳談に、稜木を語つた若き一石路の流麗な話術は、二十代の筆者を傾倒させたものだ。——川水樓の開會の辭がのべられる頃は、もう日影は障子から逃げて、むんやりした戸外の秋がいつかはいつてきていた。暮れて有志晩餐會を博物館内の喫茶室にひらく。卓上に趣味的な話題が雲のように湧く。これがほんとの俳談會である。フリーで朗暢

で、そこになんの臭味もなく、議論のための議論もない。北朗の「柿」の話。霜の朝に味わう柿。どんな経験と理論を積んでも、うまい柿の選擇は、惣の本能に人間はかなわない話。——一石路が語る。筆者は齒痛に氣を奪はれ、彼の論旨を聴きもらしたかも知れぬが、ポイントは、「終戦後の民主的風潮は、舊日本のあらゆる面の封建性の追放に急で、民族の傳統までも放逐せんとしたが、モツブ的思想動亂が解まると、民族の傳統はまた私たちの胸に回歸しはじめた。傳統文化の復活はまづ獨自の民族詩の再認識から出發する。いまこそ私たちの俳句が、大衆層にさらに浸透すべき機運に向つてゐる。厨雲は孤高の域を出、排他的高踏主義をしばらくおき、むしろ定型陣營に進んでとびこみ、彼等をひきずるべきである。厨雲最近の傾向は感覺の追求にうき身をやつし、感覺のための感覺が迎ごうされていると思ふ一言葉は違うがこんな意味のことを云つた。一座の意見も、厨雲の藝術的潔べき性をもう少しなんとかして商業的な政治的な觸手を動かすべきだというに一致した。

先生は、先生の提唱する藝術以上のもの、假稱「みち」についていつかまとまつたものを書きたいと云はれる。

應に酒の匂ひはなかつたが、上野の杜の秋夜は、藝術をかたるによく、ひさしぶりに快適な亢奮を覺えた會合であつた。大會出席者は

(東京) 秋山秋紅蓼、吉澤稻市、渡邊さとる、天沼秀夫、原農平、宮田白桃子、鷺見泰、森田和夫、土屋安志、大梅居雲水、今哀姫、柴原夏介、岡野宵火、小川都影、飯田三砂、天沼斑人、藤野番紅花、橋本夢道、或石龍樹、山本篤子、木村飛泉子、堀切春扇、鈴木單衣女、瀬川一步、吹野筑波、五味永信、爾浩二、加藤裸秋、夏堀望子、栗林一石路。(神奈川) 新納香樹、平松星童、東松八

洲雄、永井橋火、加藤六六子、青木青華、小林不惜、齋藤比斗子、小泉鬼魂郎、白澤道子、三井不二雄、筒井潔吉、芹田鳳車、鶴飼管二。(埼玉) 中里春雪、家坂留子、古瀬長榮、三井澄雄。(千葉) 横山和史、相京晴樹、深山きよ、吉原三峽水、名雪理輝。(栃木) 日向野秀策、鷺見冬青、葉山鳴雨、篠崎早男。(茨城) 増山田比良。(長野) 大平羽人、内島北朗。(兵庫) 小谷信夫。(淡路) 山内俊子。(岩手) 折居道子。(京都) 伊東俊二。

大會詠草の中より

井 泉 水

總句數三百五十五句、この中から十句を二時間の間に選むといふことは、誰にもなか／＼せわしいことだつたらしい。その互選を採點した結果の、高踏句は、いつもの如く、會者全般の合評とした。その記事の筆記は次號にのせる。で、詠草のうちから、私がチェックした十數句についてこゝにカンタンな評をする。

雨 ふり止んでながく止んでゐる 風 車
 すべて長い句はイキせわしく讀まれ、短い句はユックリ讀まれる。此の句は、おのづからユックリと讀まれる。そして「アメ・フリヤンデ・ナガク・ヤンデキル」といふ四段にされた、大それたものゝ性格をよく出してゐる。たゞ雨、それだけを賣いて(他に何等の取材をしないで)これを句にしてゐるところは、特殊な行き方である。

生れた日の剛少しこけたのもたべふしどにをるはかり 重 三
病牀生活の句とは説くまでもない。病みついてゐる淋しさを、セ
ンチメンタルにおぼれずして、そうした生活が自分の平常のものに
なつてゐる、その「平常さ」を出したところがいい。しかも、誕生
日だといつて、かくべつかわつたこともない、その「平常さ」は、
考へようによつては病人としての有難さでもある。

雲を月が出る女すがたをふりむく 秋 紅 夢
浮世繪風の色つばさとも云へるし、江戸風の軽さだとも云へよ
う。とにかく、詠草の中で、クセモノだといふ風についていた句
だ。「月が雲を出る」と普通道に云ふべきところを「雲を月が出る」と
書いたところにも一クセはある。

ゆうだちの、すすめ葉にをりそれから本ぶり 農 平
「すすめ葉にをり」で一度、焼きあげたものを「それから本ぶ
り」で、もう一度ウソグスリをかけて仕上つたといつた風な味だ。

家に佛壇とたんすとある田甫人のあるのが見え 稻 市
秋のはれんとした感じ、家の内も家の外と同じ光が、かくすと
ころなく行きわたつてゐる。この佛壇もたんすも古くくすんで、土
のやうな色をしてゐるのだ。先祖代々、じつとそこに住んでゐる家
が、根をはやしてゐるやうな、何はなくとも、それでいいのだとい
ふやうな氣持である。

澗 卷 く ダ ム が 月 夜 の 落 葉 飛 泉 子
線のふとい句だ。短い表現だけれども、いわゆる短律ではない。

アラケズリ調といつた感じ。で、ヤツツカミといふものがない。
コンクリートの感じだ。然し、ダムはコンクリートで作つたものだ
し、こうしたコンクリートの美といふものは今後新しく見つけてゆ
く必要がある。

秋夜が兩音になつてきた聖書の厚み たか子
「聖書の厚み」は辭書の厚みとはちがう。黒い革の光澤と手ざわ
りのやわらかさが、秋の雨の夜の落着の中に其處を得てゐる。

秋大根辛しちりめんざこ白しけさは妻とぎり 信 夫
朝食の膳の上の質素な風景。小鉢の中に「ちりめんざこ」と大根
おろしがある。それを手に取りながら、秋を感じた氣持。「白し」
は自分の心だけでうなづき、「辛し」は、これは辛いなアと妻に云ふ
言葉であろう。「妻とぎり」がいい。

ゆうべ月のけさのすすき穂 専 子
この「すすき穂」は前夜、月に供へた燈のすすきではなくして、
戸外にあるすすき穂と見たい。若しこれが一めんんのすすき原とする
と月の落ちた方を眺めやる氣持も出て句の實がすつと大きくなる。

浪 音 の 冬 に ある 家 黎々火
これは短律のシンズイだ。雪舟の破墨といつた風のタツチであ
る。雪舟の破墨が安易に模倣されて、たやすく俗化することく、こ
うした短律も、その力量なくして、この形式だけのマネをするとい
種の層雲式ツキナミになるおそれがある。研究するのは宜し、モホ

ウすべからず。
句を

月 か ら こ ど も は ひ ぎ に く る 黎々火

今日の句のうちで、私の選に順位をつけるとしたらば、私は此の句を天位に取りたい。「月から」といふ觀念的のことでありながら、其が、誰にも月の光の明るさを印象的に感じさせる。作者の「ひぎ」の上にも月の光がさしてゐるようだ。又、これは一般的にも解りよい句だ。しかも通俗臭味がない。世間には、將來こうした句をひろめたらば好いと思ふ。

うす日 がい つか かけ を な く し て 歩 い て ゐ た 巴水樓

うす日の残る道を歩いて居ると、それがいつか影つてゐて、その同じ道をやつぱり歩いてゐる。これは或る一日の或る時の感じだけれども、こゝにフツと人生を見た感じはたしかにうなづかれる。

呼 び は な ち 川 巾 の 夕 明 り 北 朗

「呼びはなち」は渡し舟を呼ぶのではあるまい。何か、川の向うへ云つてやらねばならぬことを叫んでゐると見える。返事はきこえないが、それで用はずんだやうでもある。季節はかいてないが、秋の午後四時ごろを感じさせる。

貨 車 の ろ く と く れ て ゐ る 橋 火

少年俳句といった風な、童心の句。貨車といふものゝ性格の一面が好くかけてゐる。大きな驕の構内、もしくはその附近である。

二百十日の風が通る時子供すき原を豆腐買ひです 星 童

「二百十日の風」はうまい。「豆腐買ひです」といふことも、豆腐買ひにゆく——など、いふよりも、すつと子供の氣持が生まれてゐる。さるの中に豆腐が見えてゐるやうだ。すき原の風をばらむ風もなま／＼と感じられる。

萩の花、うなづいてハンケチ弄んではかり 砂吐流

若い人の好みそなな句材だが、萩の花とその女とを同じ看點から取りあげたところに、主観的な情熱ではなくて、客観的な描寫のこゝろであることは解る。ハンケチの白さが印象的である。

新月、草の實いつか赤くなつてゐる 田芥子

大そう透明な空氣が感じられる。新月は、雲もなく澄んだ空にある。草の實は埃り氣のない清らかな地上にある。日暮れではあるが、草の實の赤さがたしかに赤く浮きで、感じられるのも、大陸的に透明な空氣の作用である。作者はコロラド州デンバアで、飛行便を以てアメリカから寄せられた句である。

くるみおちて少しは寒いお僧とゆく 久 枝

これはカリフォルニアから送られた句。日本の風景としても味うことが出来るけれども、くるみ林の多い、あちらとして又、外地に骨をうづめる覺悟をして生活してゐる人の氣持として見ると、又、別の感慨が味はれる。

明月壇

櫻田輝郎

豆の花茄子の花めうがの花も夜明である
月の靜かき葉を落さない木が影してゐる
岩に咲けば今日は秋の日もよし
女かしの犬つれてゆく秋の山すばらしく晴れてゐる
かごに摘むほどのはたけがあつて夕べを來てゐる
さきようよけふはよろしく細いひもをすんで起きである
門ひらくと朝日、へ花賣車が來る
霧が門ひらきに來て咳をしてゐる
二三日すすしく雲が稻妻もつて夜を動かす
かぜがあるので空の星かぜがあるので水の星さようなら
木の葉の寝返りとなない夜氣が夜露となつてゐる
かげであるひかりである水の落下であり
月光であり浪音しばらくは新月をなためにして丘をゆく
あきぞらてのひらが汗かきました
つまつてきた日あしが製粉工場の壁にそうみち
家なみの上に真夜の雲のたなびいてゐるのも
月は待つばかりの机が一つ
星がふるような荷足舟がつしりたむろしてゐる
月のない月夜の汐がふくれでくる
木犀の匂ひが夕月が紙のような
灯が寒々とにわとりのこゑも地震のあと夜明け

内藤英夫

永田杏平

加藤白水境

あめの道の電氣がつくでんしんばしら冬
月が一本の松の木のかたちとなる道を戻る
尾が木にまた干してあるあき
木犀、秋がまつたく晴れきつて水にうつり
こんな世の中へ大根が芽を出してゐるあめ
松の木秋の雲がしづかに湖へ出でてゆく
かいら捨ててあるそこにふりやんで雨のみかの木
石、光どこにもとどいてよるがふけてゐる
四角な窓に白い雲が夏がま正面にきてゐる
花びら散るとして私達堤をゆく少女たち舟にゐる
駐在所とそのあたり稻が風にねたまの嵐の明けてある
家の灯が家の持つ影が月夜の稻架

石川舟洋

日野素木

句ひがちその葉きむ軽い音のランプに灯を入れる
母がたんねんの胡麻少し干してあり白い障子
日がしらかべ枝ばかりになつてゐる
山が雨の中に暮れてくるラムプ灯のいるになる
傷が秋をしつてゐる眞白なガアセ
コスモスが分敷場女の先生の聲してゐる
茶房の女から霧のふる夜るへドアを出る
宵茶があおお漬つてこのごろ山がはつきりしてゐる
空が秋、山が秋、行く所まで行つた所で待つてゐる
うつむいてたたみの目のそろつてゐる孤獨
夕焼れば、ふるさとないものはない三軒同居
手にとれる所にあつていぢぢくちびるのよな赤さ見せてゐる
粟に雀の重そうになつとる

池沼星兒

加藤六六子

影をうしろにあるいてきてここから石段月夜

小泉 鬼魂郎

稲は穂になり穂がみのる風が穂にある

淺野 保榮

雲はしづかに雲のかたより炬目をゆく

河いつばいの明るさを潮ましてくるあさ

少女がふたりと少年空に柿が熟れてゐる

あさり潮吐かせて厨の秋暮れのけしきとなる

街角のあかりは虫寶の少女のもつ灯で

雲とほくからよんでゐる

もう祭になつた音が朝、カバン掛けてゆく

月が動いてゐる口笛ふいてゆく

水田 草史郎

秋、風がまた星をおとしてゆくので

いもですませば足りる茶店へ来て君も來とる

もくせいにはほう秋の山へは下駄はいてゆく

あめ、がちすに頬つけてちよつとすねてゐるのです

秋ぞら鱧骨に風吹いて工場地帯夕焼

少しすつばいのが雨のはいつたいちぢく、それたてしまふ

ばくおん、星の中の一つたしかにうごいてゆく

日が暮れると月のある道のききようかるかや

遅くよりでる月を妻がゐるそば

松林の裏朝のうち葱畑に雨ふつてゐる

お客として離れの庭木が西日で欲磨見てゐる

ポアチが二本と目があたりタドン工場が驕るまえ

風よりの石垣の古い樺の木村長さんの宅泊めて貰う

山宮どうの甘すつばい幼き思ひ出の一つぶ一つぶ

隆が月夜であるピアノのせん律

ハケンしぶきをあげて島の娘さん手を振りほくハンカチを振り

雨降れば朝顔ひるも咲き切手買ひに行く

別れとは、蒼い海を白い泡にして消えてゆく

大島さよなら富士の見えるにも船がひどくゆれます

白波打ちかへすふたりだまつてゐる

少女今日より冬服にして並木道朝早く通る

マツタとびついてくる繪具箱ガチャガチャと行く

林の松の枝にも歌う子の顔にもお月さんの光り

まんじゆしやげ水もつて母子にて通ります

夕焼の富士チニス買けても期かでかえる

わかれ道でわかれてからの月のもどりみち

灯がともうつて秋ふつてゐる雨

ほし草つぎつかかえてきてつんで夕焼けてゐる

炬日ことなく暮れんとす木槿高く咲きゐたり

仔猫をひぎに少女夕飯炊いてゐる燗い色

日が草にきえてしまふころのしごとしてゐる

川原泥草干からびて幾日それからみるがお花さき

犬飼 啓三

犬飼 啓三

吉原 三峽水

走内 庭草

平賀 夕星

小栗 水苑

中西 國友

山内 俊子

雨宮 すぐる

宮田 白桃子

水田 草史郎

高橋 幽亭

淺野 保榮

淺野 保榮

高橋 幽亭

宮田 白桃子

宮田 白桃子

走内 庭草

走内 庭草

走内 庭草

高橋 幽亭

高橋 幽亭

朝草かかさず刈つてりんどうの花咲くところ
竹久 清信

秋の山遠く白い障子あけてミシン踏んでる

むしれればはじける豆をむしりけふ豆むしり

ややこは背なに落葉もやせばけむるなり

流れに足をいれる秋がうつつて流れる

おひよりつづきのひがなほおしめが乾きま

和尚さん尺八吹いてる星空が月になる

犬が月にほえてから電柱にしようべん

本もつて一人きて栗が木からこぼれる音する

たけやぶ夕日するわらやの白かべ

流れてまびき菜の細かい根洗うてそろえてとちり

夕やけからす歸れば子供二人の父である

ここでも物が高い話で藁屋の横もみほしてある

ふと森のしづけさはあしおとは送られてある

霜朝菜 畠菜の列出勤時間になつてある

最後の日が山の端に、そばの花そちこちに白く

風に散る桐の葉の青い風邪氣味である

子供と茶の花夕日がさしてある道

女工さんがうたふ歌がガラスにとうめいな秋の日は

大げやきもみぢしてまいあさ水を汲みにくる

くればやくなちたそらのくれてゆく三羽と二羽

なんでもないなんでもないはたらいてはたらいておは

風がふいてるで秋浮浪兒である話きいてある

スケツチしてある秋がうごかない一片のくも

子の赤い布圍子してあつて黍の葉さらさらと夕暮

人と網とあふれるほどな船出だ朝だ

水がふちだなさんばしなどうつし女の影が通つてゆく

水汲む音がくもなしの花白く暮れてる

家のまわりの水家を捨てる小舟で出てゆく(大洪水二句)

水ひいたあしのつぼみふくらんでる

机に手紙が一つ會ひたいと書いてある

倒壊の天主堂の鐘がなる青い芋の葉

粟の穂、電車がから通つたり製材所木をころがしておいたり

月夜さらに卓上は明るくてフラスコと液體

刈田のかたちちみづづいてふりつづくあめ

ふねのへさはしづかに白く波だちてゆく秋

列車冷えた夜が明けて大きい驛についたところ

分水嶺よりの美しい石と水添うてゆく

濠の水も兵營も秋が昔のまま貿易館へ道

柿の葉が散るなんとなく籐椅子

白馬が白くなつて古い帽子で今日も勤めに行く

夕べふくろが鳴く葉が散るまた鳴く

ひとり子をうしなつたとともいぢくくちいてる

雨はれた山と山で石工さん石切る音

もう話がない晝月のある青い並木路で

道の枯葉の栗の實なんと坂になる

姉の袷せふしあわせ祭にきてる子等におまつり

キリキリぶりき切りなまる秋の日ほそいせなからおきする(訪草一氏)

船頭さんひげそつてある秋が河にうつつてある

焼跡もすつかり秋べんとう箱さげてかえる

中村 市朗

森田 和夫

梁瀬 阿羅興

瀬川 英吾

千葉 吐男

松井 柳城

平松 颯々子

田中 白路

小川 環

梅路 紗智子

湯淺 影外子

鷺見 泰

飯田 三砂

石井 洋音

梅木 成敏

三井 不二雄

飯田 三砂

石井 洋音

梅木 成敏

三井 不二雄

飯田 三砂

石井 洋音

梅木 成敏

三井 不二雄

こんなにユスモスが咲いて前だれでふいて出てくる
 ひとあめはれたあとの湖と山子にこがせて出る
 萩の影ゆれてゐる障子あかるく縫つてゐる
 鶏のとさかまつかな日がかげつてきて白いユスモス
 秋のにほひする土へばらばらまく
 各々花束メガホンの様におけいこがひけてでてる
 天の川あおくさの匂うを
 窓、窓、だんだらの日除にして海風ふく
 月の寒い驛に降りたつ歩くとする
 けふは手紙の来そうな唐黍の穂です
 夕やけくもの巢にくもがかえつてゐる
 新聞屋さん一寸蒲子の色をほめていつてからは誰もこない日南
 雨がたたいていつた土のにおいに
 隣のわら打つ音も蚊のなく聲も今日も暮れる
 あるよるこびをもち力耕を割つてゆく
 けふの日を洗濯物につも、雨の枝に竿をわたして
 あなたの沈黙が、ちも、秋風へ消えてしまふ
 物おのおの杖をもつて私だけが覺めてゐる
 別れてか、奥さよなら、月夜の葉が散る
 夕日の長い影も、町がみづてゐるつとめから歸る
 驛長手をあげて、で、みらして君秋風に手をふる
 丘にのぼつ、ふ、みんみなみえるせうせうと秋
 太陽、平、丸、離れ、み、ごと、な、犬根を
 露店をし、か、ぞえる音の夕ンべは寒く
 まつりのはや、るとくらははたけの星がとびます

下總 磁朗
 福阿 やゑ子
 青山 さだ子
 吉岡 郁子
 鵜飼 宵二
 佐藤 コト
 岸田 谷川水
 永井 朗南人
 小林 明峰
 明石 青蔭子
 三井 澄雄
 中本 義夫
 中村 威

びんぼうでもとにかくこうしくらし土が芽を出す
 虫よ鳴いて鳴いて柿がうれてくる
 がちゃんと閉めて班長さん一番おしまひに出る星がつめた
 秋めいてまいりましたので地卵の大きなの
 町なか秋の日貝賣りさん貝はかつて賣る音
 こねばちに妻の指ふとし今日のものつくるさびし
 寝るとき着物かける釘があつてさむい影を壁に妻
 はさみ竹が柿の枝に大きい雲動く
 出水あとの水溜りにうつり荷車重くゆく
 サンダルで夕日で長い影でひとりと
 街路樹目をなくして子を賣うた子でうたつてゐる
 つめた朝のみな呼吸をしてゐる新聞買つてゐる
 木の百舌の聲家の牛の聲稻こいてゐる
 落葉焚くけむり消ゆるでもなくくれてくる
 病人よい方で瀧園千すのも秋晴れ
 南瓜の蔓が南瓜をつけて屋根の石暑くなる
 おんぶして日傘でいちじくの葉にゐる風
 つばめが歸りたい日で御輿がくるジープが行く
 秋空青しとも青し水のなか水を求むる
 白い尾花に送られていつた女の山の小驛で
 浪のとうとうとはまぐみのうるるなり
 わたれば、橋の下流れてゐる秋
 顔を洗うとき柿の葉かがやけり一枚一枚
 灯の下横顔が梨むいてゐる
 百舌がないて柿の木に雲の白い風がくる

大石 香代
 田中 敏三
 柳澤 白草
 尾畑 豊舟人
 野口 光
 横瀬 青山子
 夷石 龍樹
 鶴見 火差之
 中村 未知男
 林 泉
 都築 種夫
 眞原 咩甫

山鳩なく寺のおもいくぐり戸
 月夜は遠い井せきの水音
 雨の樹きいろいろ葉のちらり雨のお寺の屋根
 この道草枯の都府樓へゆくみちのてふてふ
 牛の手入れすませていつもの星が出て秋になつてゐる
 表も裏も流れてゐてあひるのゐるのが私の家です
 柿をもいではかごに嬢さんかすりのきもの
 炎天のぼりがくたりになる下口押ししてゆく
 朝顔の種種箱に入れて刈田に細い雨ふる
 稻刈手傳つて古里へ行くしなのえちご山々初雪
 傘もつて迎ひにきて道の小石ぬれてゐる
 秋ふかみ音のする風となり夜
 波に花びらをちらしてそれからもしづかな
 しあわせといふことは赤いトマト一つ手にもつ
 町はづれの一軒にも祭である
 墓に枯葉がかさなつて風が居る
 南瓜の花のしべ深く蜂が入つてゐて静かな朝
 秋の夜消ゴムと三角定規がだまつてそのまま
 大寒のたもと草昔は血止め
 夕がた時雨針はかぞえてからしまら
 宿のてすりの暗い海を、海鳴り
 虹がこぼすしづくを、鉄洗つてゐる
 どこまでも稻の穂波嬢さんもひききやはんで通る
 子供が風の中散るとポプラが散つてゐるばかり
 大きな鉢で爪をきる火のないせどもの火鉢で

倉本 勤也
 下田 夢
 上山 樹塘
 竹澤 しげる
 栗田 千可志
 田中 牙子
 木滑 洋子
 尾 佐六
 加藤 陸男
 矢島 川せみ
 野條 蒼風
 廣橋 鋼一
 増山 田比良

ガラスをみがくと秋空になる子供たち窓がたくさん
 いこうの着物がすり落ちそうなる暗い寒い日で
 夕照ると枝から柿の葉が落ちるその邊いつぱい
 齒をみがき鎌をとぎ露草さいてゐる
 酒屋の酒樽仰向いてゐる草の穂かみかみゆく
 夜がまつくらな百合がむせるような匂つてゐる
 こまがこまの早るにまわるとぼの着物で風ふく中
 月が白くてきのう歩いた路である
 やけあと草の實、マーケットはにぎやかです
 霧暗れゆけばすすきをばな山のかたち
 製材所が音たてた木香り山霧はれゆく
 つぶれるうわさの工場の塀の古いビラの秋の日
 たばね髪にして素足であるき砂の貝殻
 コスモスの花粉がこぼれて机朝になつてゐる
 みどりごの瞳の空が秋である雲
 佛さまのおん前日のさしたるて秋は朝は
 ひとり稻刈る寒にしづかな月があるばかり
 秋風はつきり言つて君のひとみの中の僕で
 拾つた吸ひがらうまそうにすつてゐるのも秋の日
 花びんに水さしてまたしぐれる音で
 枯木のよちに立つて柿の木つめたい雨ふる
 夕日が山の線を明るくしてゐる牧場の柵
 みぞれふる日のうちのものばかりこたつて
 弱いからだであることもむしろの豆が日の中
 お醫者さん診察着が白くてユーカリの茂みに小鳥ゐる

山中 つとむ
 長坂 くに
 矢内 惠美子
 阿部 シゲ
 西山 賢珠
 五十嵐 みい
 海堀 鬼胎
 吉田 冷花
 千葉 一芋園
 高屋 えいじ
 田中 千治
 前田 睦夫
 永田 孝子
 黒部 祥逸
 栃本 敏男
 佐藤 榮子
 白鳥 静風
 杉原 明雄
 山田 秋泉
 橋本 武芳
 佐藤 正作
 松下 美年
 木俣 とさ子
 松下 多賀
 河合 美紀

あきないがあつてあきん風呂敷背負つて雨の中出てゆく
 吾子が繪にしてから切るとする南瓜のかたち
 遠い牛がないで近くの牛がないで朝
 雲がときどき月を出し君も踊りにゆく
 松ぼつくりがおちてゐる道が松林になつてゐる
 山羊の乳房のゆたかに木の蔭口笛
 花が咲いて花のように子供たちも日曜
 カタリと紙芝居の繪が變つて空の赤とんぼ
 子等のにほひにとりまかれて今日が終ると月に
 風がガラス戸叩いてゐるボンボンダリヤ
 風が二本の電線にはなしかけて山へゆく風
 赤ん坊がないでなくてお月さん黙つて月夜
 土手のすすきの穂がはれたたこあげする聲
 こえ波む手の先つめたくて霧の中の朝日
 赤くなるりんごが赤くなつてりんごの木にりんごが一ぱい
 夕日川一面に玩具のようなボンボン船ボンボン
 白い月が浮いてゐる山の香の山にゐる
 谷の奥の一軒家で歸りも丸木橋わたり
 川の向うの松林が秋晴製材所の音で
 とりごやにとりがおちつくとひつそり夕月
 たべられる木の實はたべるとんぐりごまよくまわる
 臥つてゐてヒヨの聲もつるし柿の日かげもうすれる
 箸のかたち竹をけづり膝の竹くづ秋の日
 こだまが雀追うてゐる山の白い雲
 コスモスよわよわしい蝶がふかれてくる

佐藤 証市
 丸田 治子
 山田 のぶと
 萩原 肇
 中垣 日出子
 新井 房子
 中垣 蕙美子
 青山 滋
 太田 松子
 小部 一樹
 鈴木 昇
 寺田 山茶子
 井上 英子
 横井 歩
 青木 丘草
 尾畑 雅美
 近藤 白膏
 村越 庄吉
 青木 不水尾
 廣石 たみ子
 石田 静子
 矢島 みよ
 小川 清人
 佐藤 緑雨
 黒部 二和子

こ う ろ ぎ よ ひ と り 繩 な ふ
 軒につつて赤い唐がらしまことに秋
 青柿おちてゐる夕日がある
 音は流れの音ばかり山の學校へ通ふ道で
 櫻の夕日牛が諸蓮たべてゐる
 ちよんちよん枝をきつて背空風が吹いてゐる
 落葉しきつめて道が月夜葉がちつてゐる
 新聞よんでしまつてからも枯枝にからんでゐる蟹
 つり 橋 月 が 出 て 風 が 出 て ゐ る
 山茶花さいた窓をあけて白い本にゐる
 市場のなかのお地藏さんに花がたくさん夕暮れる
 あきらかにあきである影がかほちやの影
 母そこだけ目鏡でよんで柿の葉がちる
 犬に犬のほえてゐる波にてる月
 屋根が落葉をのせて既に馬のゐる
 病む妻の化粧する窓の霧うすれゆく
 おちばする 桶の水にある背空
 ここの家のコスモスの風あな家の紅いコスモス
 水にうつり窓の灯が機械の音が秋の夜
 すつかり鋤き終えて冬山の入目を背にする
 大ゆれにゆれてゐる高い一本の紅葉してゐる
 ある 夜 妻の感想しみじみ虫なく
 きれいにはれて家じゆうで種まきする
 朝のプラン使つてゐる沖の島には日がさし
 魚たち見えてしづかにおよいでよいなぎ

安藤 錦泉子
 伊達 宗勝
 立尾 修
 内山 榮
 飯野 無花果
 坂野 正徳
 雁本 竹三
 中島 泉蛙
 鈴木 尚子
 寺田 夷平
 川上 誕生
 中野 弘雄
 押目 光一
 阿部 雅生
 村井 淳一
 櫻井 白朗
 藤見 小夜子
 梶尾 美津
 山内 敬子
 福田 昌平
 柴田 小百合
 岡崎 雪炎
 淺賀 ふじゑ
 北原 ますみ
 森 久子

・ 曆 雲 社 句 會 (京都)

十月十七日、京洛の秋色の中井師をお迎えして、例の菊溪亭に座を設けた。そのことは先生の菊日和のなかに書いてある。神戸から英之助、六郎、夏木、郁子、能勢の夢郎、西宮の信夫、近江の呵歩、奈良の千恵子、地元では木衣樓、仙醉樓、卓朗、榮治郎、千代吉、寶珠、すぐる、正行、伊達、傘人、草史朗、小平、俊二の面々先生を圍んで和氣あいあいの中に嚴肅なあるものあり、藝術以上の道といふものを皆感得するの面持だった。先生の「膳に秋茄子の色も京の朝しづかにくもり」が高點だった。

・ 楠 の 會 (神戸)

先生が十七日の京都句會から、能勢の天宵軒を訪ねられ、それから神戸、十九日の午後瀟々亭の句會に臨席された。しづかな雨になりました。「さくろが口わつてからの秋の日がつるべ落し」この日の英之助の句の如く、すぐに日暮れて、先生も秋の旅あはたたくあられます。參會者は俊二、信夫、恩三、應香、赤青葉、おさむ、六郎、夏木、忠雄、谷衣、郁子、きよし、けん一、福子、雨聲、雨山英之助。楠の會は耕兒氏を失ひ、詩外樓氏、井夢氏が他へ轉じ、其後ひさしく假死状態でしたが、最近漸く以前に劣らぬ元氣を盛返してきました。また花々しいとは云えませんが、馬糞あり鷄糞あり兎糞ありで先づ其の根柢えに力をそいでゐるわけです。どうぞ御指導御鞭撻に御來會下さい。

・ ビル 人 句 會 (東京)

十月十八日不動銀行に於て、當日は井先生が京都の方にお出かけで御出席はなかつたのですが秋紅蓼、鳳車、稻市、さとる、八洲雄農平、飛泉子、春扇、番紅花、星童、三峽水、草露、香樹、いちろ、う、夢人、鳴弦樓の十五名で盛會裡に楽しく半日を過しました、殊に句評も諸先輩が懇切に指導してくれたので誠に上々の句坐に終ることを得ました。(棗人)

パツタ突き當つてくる道繪具箱が鳴る 三峽水
太陽、銀のシャープから黒いしんが出る 星童
落葉すると川の中ネオンの點滅がゆがんでゐる 飛泉子
はげいとう荒れ模様雲とぶ上の雲夕やける 番紅花
日に當てたことのないものを日に當てて一人である 夢人
秋の花うなづいてハンカチ弄んでばかり さとる
日が落ちて空があんすいるの菜園に出て若い奥さん 農平

・ 妙 蓮 寺 句 會 (横濱)

ハマの會谷津の會合同で十月十二日(日)午後一時より木犀の句ふ妙蓮寺で開催、出席者は井師を始め鳳車、青華、棗人、番紅花、飛泉子、香樹、稻市、覺神明、春扇、不二雄、星童、橋火、青二、望子、昭平、八洲雄の十七名。宵火、重三、寒雄、道雄、英吾の五名より出句。當日の高點句左の如し。(八洲雄)

一寸汗のみを若荷畑の赤い鼻緒の雨で 衆人
あらしがまだのこつてゐるしんぶんはいたつ 星童
ラヂオのダイヤルの針があらしの中心 井泉水
雨はれてほんにもくせい句ふ庭で並んだくつへぬぐ 望子

・ や ま め 會 (山梨)

十月十九日東京から秋紅蓼先生を五里の山道を生れてはじめてといはれる馬で迎えました。百峰居で句座を開き、黙太、一峯、光岑、翠泉、もしほ、のぼる、奇千、百峰九名集りました。翌日はしつとりと雨になる。雨の中にとつしり山が腰をすえてゐる。その空氣の何と清純な、山の村がどぼつとしづかに生きてゐるのを秋山先生は火燧に黙々と居られ、黙太さんは雨の中を私の地下足袋をはいて五里の山路を歸りました。(百峰)

・ かみなり社十月句會 (栃木氏家)

おち栗いろよしつゆにひろう 三九
栗飯によるこびを感じ一ト朝辨當かへて出る 迫鳥子

妻子を家にやうた露が雨になつたいもぐくの葉つば

霧の夜妻にうれしいひめごとがあるあつた茶をすゝる

風 強 き 寺 の 木 の 實 を ふ み

初霜のせきれいしきりに尾を振り大祖様のやね

雨やまぬ雨戸に 稻妻してゐる盆朝のくる

つれなく歸へしたことも類さしの葉をぬく

・ 稻の會十月旬會 (栃木氏家)

うつつてきれいな鳥が鳴いてゐる枝が秋で水の上

所詮この土地に住まう秋の山稻田

はつたけ一つを取り去りがたき思ひをのこし

・ 但馬の會 (兵庫縣)

十月十八日但馬旬會を希風居にて開催しました。 參會者十四名樂

しい一夜でした。 詩者も此の頃元氣になられました。 浪干が昨日は

胃が痛くて好みの柿も食べられず、一寸元氣がありませんでした。

やつぱり秋の夜はいゝですね。(草山)

垂り穂の三日月のある道のあたりを流れてゐる

垂穂くれるまへのあかるくてほつんと一軒

織は立つたおまつりのこぼらほつてくる

となりの牛がないて秋夜である

ほどように降つた雨の太根まきごろを疎く

そしてかへる牛に道ゆする明日も日和の陽が入る

走つて子供見てゐて子供ボプラが夕日

幾月夜かたへだへなるは川の千鳥か

澄んだ空まで小さく消へて行くどんぼ

これは火鉢あれは時計をれだけの部屋である

疲れ切つた 顔、車窓、田が豊年

舗道にも灯をおしみなくせつものあきなつてゐる

あすきの赤さがまつぶた一ぱいの照り

折莖子

鬼繪知

ひさ夫

道正

福田

市籠

市籠

しげる

芳秋

詩老

浪干

三露

行露

三松

紅雲

青水

白雲

希風

淡山

健二

草山

一路

・ ハワイ餅旬會

八月例會は二十四日午後、例の如くカイムキ高臺の宙夢邸に於て

開催す。 今年は數十年來なき天候不順の年なり。 八月と九月の兩月

は布哇の眞夏であるから年中で一番暑い時なり。 幸に當日は朝から

カンカン照續けて年來にない暑さである。 出席者は常連の顔ぶれに

て宙夢、是道、素仁、更涼、翠溪、貞生、王白石、水穂子、海馬石

北の人、文詩朗、十九子、余の十三名。 出句者十四名のうちはるば

ると祖國から、とくにわれら同人の爲に恩師井泉水先生と、京都の

俊二兄の御兩人から玉句をいたゞきしことは實に記録破りの感激に

あふれたる感謝の集りなり、 同人一同は寔に有難い事であり、更涼

も何か責任感があつた爲か選句に對する採點の終る迄は〇〇印と〇

〇印は絶對秘密にして斷行せり。 愈よ點數發表の結果、〇〇印が井

泉水師俊二兄の尊い玉句でありし事を知つた様を譯で一同は驚き、

有難く深く感激に打たれたり。 満座の者は異口同音にて只頭を見合

せて驚いては襟を正すことしばしなり。 俊二兄の新生活の御句、師

を思はれる御句、新しき家庭の人として又、師弟の關係をしたわれ

し御句に對して深く感激せり。 選句發表後は、宙夢奥さんの心づく

しの響應をいただき頗る盛大裡に八時に散會せり。 あとに残りし者

は大いにメートルをあげて、十二時頃まで居られしと聞く。(翠山報)

層雲賞

平松星童君

神奈川縣大船町山之内 圓應寺内

右昭和二十二年度層雲賞を贈呈する

層雲社

河童(自畫像)

近木黎々火

月を遠く河童石にゐる
 河童明るい夜を暗い水を見る
 秋かぜ河童壁に身を寄す
 おどろいて河童ひかる月夜をまがる
 どこも葉が青い河童あてもなくあるく
 河童やせしと思ひ月に身をおく
 河童木の葉の風をみる
 河童ヒヨイと足に足かさね月夜
 月の夜草の穂をかみ河童あるく
 河童の足もと葉が笑つてゆく
 河童月をふりかへり道がある
 月が、胸の骨なでて河童

月光

岡野宵火

逢うまでのかげおく月夜の木と
 ほうつて星のもえがらのような火を海へ、ふたり黙つてゐる
 つきよやまをかきする月へでてゆく
 愛は惜しみなく奪う冬はつきよの雲あをししげし
 月あかりのまなざしのげき情
 月がけひとつにしたところをわかれてゆく
 月のあかるさを月にでてしむじみ、ふたり
 てがみでやくそくしてきてほえむもつきのあかり
 わかれてしまえば月にひらひら遠くなりゆく
 月はあかるしことばすくなくわかれる
 鏡へえりあししくして窓のしろい雨がもうすこしたつと夜

制作餘談

秋山秋紅蓼

私は、このごろ繪を描く機会が多いが、なか／＼
 思うやうなものが出来ないので筆を投げてしまふこ
 とがある。だが、しばらくすると又やり出すが、自
 分で描きたいなと云ふときに出来たのはよろしいが
 他から頼まれたりしたときは、感興がのらない
 せい、多くの場合は、どうもちぐはぐのものにな
 りたがる。おもに俳諧賛であるが、繪が出来ると句
 を決定するのだが、之れがまた適當のものが無いの
 で、句集から探し出すのにひと骨おれることで、そ
 れが見つからない時などは全く疲れてしまう。でも
 やつと句をさめてかかつて賛を書くのだから、よく出
 来た繪などの場合に賛がよくないことになる、こん
 なときは、自分の力の不足をしむじみと考へる譯だ
 が、それでも、いつたん筆を置いて作品として自分
 からはなれてしまふと、筆を執つてゐたときの氣持
 とはちがつたものになつて、さきの繪が見なをされ
 て來ることがある。かうした心理の相違から、一つ
 の作品でも、みるときの氣持に依つて鑑賞の差を生
 じてくると云ふことは、藝術といふものゝ性質の中
 に、さうした傾向が潜在してゐるのではないかとお

月夜の土へ影して船がらの階段
 しぐれはれた月夜は驛の青いしぐなる
 月夜は運河のほひのある家の横はたけ
 遠くつづく貨物列車の音の長い長いよるになつてゐる
 九月はまだ青い田に二ばいさしでくる陽が教室の黒板
 ふろのふたのこうろぎでおさきへいただきます
 明るい月夜の案山子かすりきてゐる
 なにもないへやにおかれて骨董である
 タイプ打つ手にたんぼの毛のとんでくる五月もおわり
 ひたいに熱があつて遠いそら雲のあつて秋
 ふつと淋しくなるときのきゆつとほうづき舌の上で鳴る

のきく

松尾 あつゆき

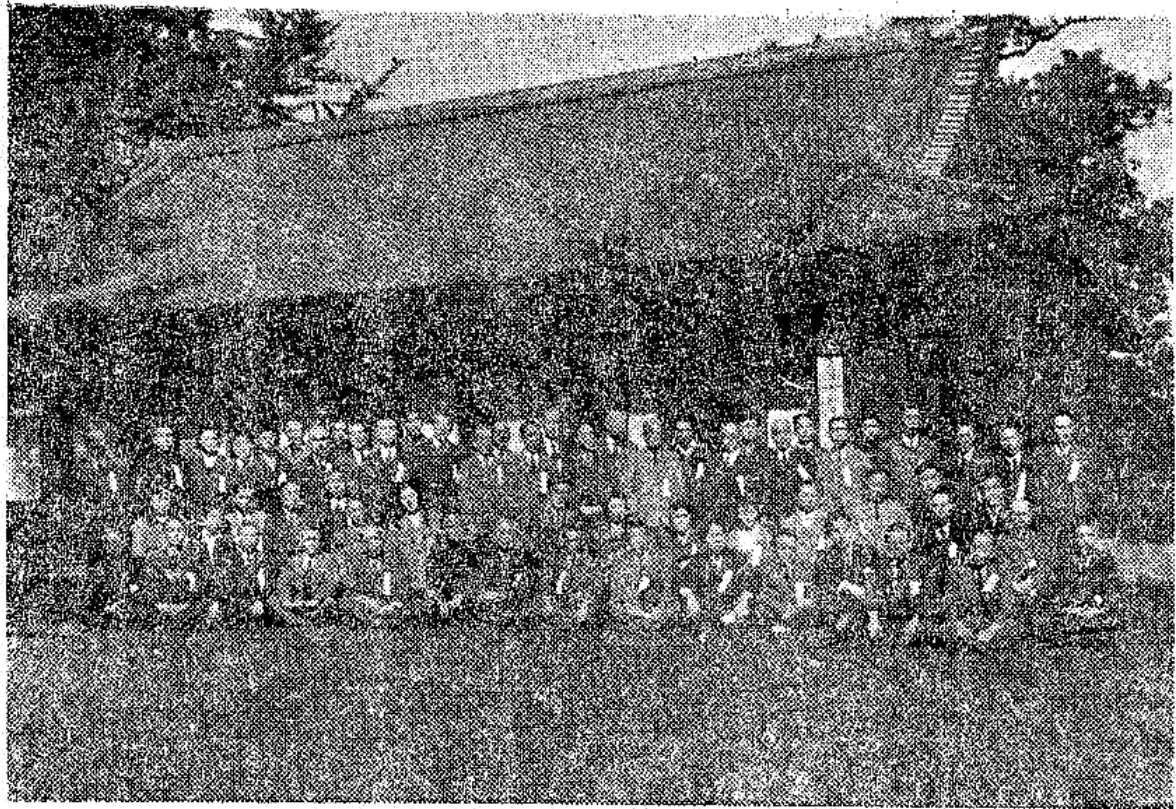
波に月のなごりがゆらいでゐる月の出
 なつくさ子の跡とむろうてかえりの氷水で
 今はもうたびひととして長崎の石だたみ秋の日
 仰ぐにも戦争の遠いおもひ西海法窟の額と秋ぐも
 かなかなほんのうまれただけのふるさとであるが
 くさがよんべよいつきよのよがあけたくさ
 波に日のなごりがゆらいでゐる月の出
 山から日がでるとせまい家の朝日机とあるじ
 のきくわたしよりほかおもものないおまえの日である(墓参)
 墓の前おまえが見てゐるような落葉をばく

もふ。これは、俳句の場合でも同じことが云へる、だから、同一作者であつても出来不出来が非常にある譯で、これは、他の實用的製作品などには、かうした傾向は少ないかとおもふ。それは、仕事の出来不出来は勿論あるとしても、藝術品ほどにその差のはなはだしいことはないとおもふ。更にまた、この傾向は、大作のものよりも即興的の作品に多く發生する現象のやうに考へる。大作のものは初手から思ひをめぐらして設計的に取りがゝるものだからで、小品ものなどは、即坐に仕事にとりかゝる場合もある譯で、感興の湧くところ、藝術への觸手は動くのである。その點、くつたくなき氣持からいゝ作品が生れるのぢやないかと考へる。馬鹿に頑張つて取りかゝつた場合などは、極めてきうくつなものになつてしまふが常である。かうした心理的な創作過程の良否は、永年の修練をつんだものと否とも勿論依ることになるだらうが、即興的作品にその性格が多いと云ふのである。小説のやうな長篇のものになると、腕のきまつた作者のものは、大體において出来不出来はない。それなのに、短歌や俳句になるとさうではない、かなりの古い作者のものでも、非常に出来不出来の差があるのは事實である。そこに、第三者の批判の眼が必要になつてくる。その必要性のために選者といふものが短歌や俳句にはなくてはならないのであるとおもふ。かういふことを云

一人さおさして一そゆうゆく
 年がおしつまつた車の輪に雪ついで廻つてゆく
 繪具皿の色が山の枯色鱗子あけて居て山のくれる
 弱い秋の目をまわる車牛が曳いてゆく
 油繪の様なくもと風船の様な朝の白い月と秋
 秋というものの比重と遠い美しい星を想うてゐる
 餘白の様な海のみろさへ波立ちてランチ行く秋
 秋まき天根の稲まくばかりに秋立ちそめてゐる
 畑までのみちに草しげつて畑は秋の午後のようにす
 雨戸をあけて秋の雨ふつてゐる二階

ひばり池を甘の下におく
 原に道が道をよぎつて通り遠い松蟬など暑い日になる
 虹、トマ下島のしづくする音で
 向うからも月夜の音する橋
 どこへゆこうよといった一軒が燒跡の粟に立ててゐるかがし
 かねたたたき癖の内、の月夜曇つてくる
 よしきり、田舟はこの田の一二枚を植えて去ぬる
 宵田、山を里に下りて汽車走りつづける
 月夜の月が消えると氣象觀測所の世と海
 うす日して跨の穂船のゐない汐が晝みちてくる
 すすき風、に高い日をおく
 虹、夕立のあと水にこまかくふる

ふと、選者弊害論もとびだしてくるとおもふのだが
 これは何んとしても必要だと私はおもつてゐる。自
 分の句を自分で判別することも或程度は出来得よう
 が、その作品の出来榮えに依つてはなか／＼さうは
 いかないものだ。だといつて選者のとつた作が、絶
 對性を持つものであるかと云へば、さうも云へない
 こともある。それは、もともと、短歌や俳句には、
 (殊に小さい形式のものほどその傾向があるので俳
 句が最も其點北極である) さうした性質が含まれて
 ゐるので、選者と云へども、その日の氣持の差から
 昨日よしとしたものが、今日はいけなないと捨てるこ
 とはおう／＼あるのだ。そこが、こうした藝術のお
 もしろいところであるとも考へる。小説などではそ
 んな現象は絶對にない。それだけに小説などは、俳
 句よりは實用的であるとおもふ。言葉をかへて云
 へば、叙事的であつて叙情的ではない。だから、短
 歌や俳句は叙情的のものであるのぢやないかと断定
 することも出来る、繪畫に於いても同様で、南齋の
 四君子などになるとその出来不出来は、まつたく俳
 句と同じやうである。しかし、これも永年の修業に
 依つて、このえたいの知れない俳句のやうのもので
 も、或る一つのコツといふやうなものが體得されて
 來ると、その流獨的なものゝ中からも、之れだなど
 おもふものをつかみとることが出来るのである。



投稿規定

俳句 荻原井泉水選

編集部選

● 投稿は誰でも自由

● 一人 一月 一稿

● 句数は一般は五句 誌友は十句 社友は三十句迄

● 用紙は半紙二ツ切大のもの

● 一枚に五句迄楷書清記

● 二枚以上は左上カドを綴る

● 句稿の添削を望む方には内規あり、照會ありたく

文章 編集部選

● 評論 研究 随想等

俳句會報

● なるべく會の直後に詠草に會の報告文を添える

● 俳句會報は層雲社に保存しておきます

● 投稿に私信や用件を同封されても差支えない

締切 毎月十五日

投稿先 層雲社編集部

京都市東山區本町十五丁目

層雲 第四一・二號

昭和廿二年十二月廿五日印刷納本

昭和廿二年十二月一日發行

定價 一部 二十圓

(送五〇錢)

前金で半年分以上お拂込下さい

何月號よりと御指定下さい

御轉居の際は發送部迄御報の事

主宰 荻原井泉水

編集兼 伊東俊二

發行人 竹内貴美

印刷人 京都市柳馬場四條上ル

印刷所 竹内萬聚堂

京都市東山區本町十五丁目

發行所 東福寺山内永明院

層雲社

振替京都八一七八番

配給元 日本出版配給株式會社

アミ-バ

平松星童

ほつとスポットライトのように日あたつてあかるいすすきがすすきのなか
少年日の暮れるにはとりをしまひ枯木林にのこつてゐる雪
ランプつけるとくりやガラスのそとの海がよる
すかんぼべつかんこうしてわかれたきり
ふとなみだわいてきたようなけんびきようのなかでアミ-バあしのばす
あらしがまだのこつてゐる しんぶんはいたつ

かぜニ

橋本七度煎

日本人のカラダにびつたり合つた!